

## 平成30年度 綾部市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成30年6月26日(火)  
開会 13時30分 閉会 15時00分

2 会 場 綾部市役所 まちづくりセンター第1会議室

3 出席者 綾部市長 山崎 善也  
綾部市教育委員会  
教育長 足立 雅和  
委 員 四月朔日 伸子  
委 員 小南 直美  
委 員 波多野 芳雄  
委 員 樋口 高夫

(事務局関係)

福祉保健部長	大石 浩明
企画財政部長	岩本 正信
教育部長	岡垣 美樹
教育部理事	小林 治
教育部参事	小林 直子
学校教育課長	村上 哲也
社会教育課長	塩見 勲生
文化・スポーツ推進課長	小林 敏和
学校教育課長補佐(指導主事)	森本 重則
学校教育課課長補佐	斉藤 さおり

4 協議事項 (1) 小中一貫教育進捗状況について  
(2) 教育大綱(第1期)進捗状況について

5 議事の概要

- 開 会
  - 綾部市長挨拶
  - 協議事項
    - (1) 小中一貫教育進捗状況について
- <議長：綾部市長>

今回の議題は、綾部市教育大綱が平成29年度までとなっておりますので、この改訂に向けて協議いただくというのが大きな目的となっております。委員の皆様から様々なご意見を出していただき実のある会議としていきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

まず、1点目は平成27年度から小中一貫教育あい紡ぎプランがスタートしておりますが、綾部市の小中一貫教育の進捗状況について事務局から報告をいただき、これについてのご意見をいただきたいと思っております。では、事務局から説明をお願いします。

(説明：綾部市教育委員会学校教育課 森本重則指導主事)

<議長：綾部市長>

ただいまの綾部市の小中一貫教育の進捗状況の説明につきまして、ご意見をいただきたいと思っております。

<教育長>

私がこだわって学校にお願いしたことがあります。

「まず、学校の会議室から離れた場所で、小学校の先生と中学校の先生が、お互いを知ってほしい。なぜ教員になって今どんな思いで教壇に立っているのか、どんな思いで子どもたちに接しているのか、どんな趣味を持っているのか、そういったことを話し合って、少なくとも顔と名前が一致するそういう人間関係になってほしい。そういう人間関係になった上で、改めて学校の会議室でこの小中一貫教育について、どうしていくのが良いのかということ話し合ってほしい」ということです。

<市長>

綾部市のまちづくり、地域政策において補足します。前提は教育と一緒に過疎化、少子高齢化が進む中で霞が関から出てきた考え方がコンパクトシティというものでした。特に広い市域では行財政の効率を上げるためにも、投資をしていくためにも同じような施設を作っていたのでは財政破綻してしまうので、1か所に集めていくという施策です。

では、これを綾部市にどのように落とし込んでいくのか、非常に頭を痛めました。68年前に1町12村で合併し、非常に広い市域です。未だに綾部出身である前に、各地区出身の意識が強いし、またその意識を持つことがその地域の活性化や地域創生の活動をするエネルギーの源になっているところがあるので、経済合理性だけを言えば、暴論かもしれませんが、綾部中学校と綾部小学校だけにして、あとはスクールバスで通学するのがはるかに経済合理性は上がり、財政も助かります。私自身、子どもにとってもその方が幸せなのではないかと思った瞬間

もあります。大規模校の中で、早い段階から集団の中で切磋琢磨、競争の中で過ごすのが子どもにとって本当に生きる力になるのではないかと議論もし、教育長に何度も確認したことがあります。子どもにとって小規模校と大規模校とどっちがいいですかと教育長に聞くと、それはなかなか答えがないと言われました。答えがないのであれば、綾部の場合はコンパクトシティは馴染まない、50年後、100年後はわかりませんが今は取るべき方向ではない。地域クラスター戦略、クラスターはブドウの房のことで、房が綾部市で、それを構成する実が各地域。その一つ一つの地域の歴史や市民性、地域性が色合いや風合い、味わいとなって、それが一つとなって綾部市の商品価値を上げていく。このような地域政策が今の綾部にはあっている、そうでないと地域が崩壊してしまうという懸念があったので、あえてその政策を取りました。

それぞれの村にある郵便局や農協、消防団、自治会連合会といった小さな拠点、その一つに学校も不可欠な存在としてあり、これらの拠点を大事にして地域を構成している。人口が減って子どもが減って、学校の統合をしなければならなくなった時に、水平統合ではなく垂直統合をしてまでも地域に学校を残すべきではないか。課題解決から出てきた小中一貫教育と地域政策の中でこの地域を水平でなく垂直統合でも残すというところが重なって、ソフトとハードが一体となって施設一体型の小中一貫教育という捉え方をしています。ハードのみならずソフトでもこの小中一貫教育が綾部の子どもたちにとって、地域にとっていいシステムで、成果が表れていることは大変嬉しく思いますし、課題があればその解決に地域政策と教育をうまく合わせていきたい。ひいては定住促進、交流促進とさらに発展的に、学校が地域のプラットフォームとなればいいと思います。

#### <樋口委員>

適正規模とか集団が人を育てるという教育観がありますので、綾部市の学校の統廃合が進捗しないことについて、どうなっているのかと思ったことはありました。

教育委員となって教育について考えるようになり、先ほどのプレゼンテーションの内容がストンと胸に落ちました。先週、豊里中学校の公開授業で1年生の英語の授業を参観させてもらいました。中学2年、3年の内容を1年でするような高度な英語の授業でした。整然と授業を受けていて小学校5、6年で積み上げてきた成果が、中学校1年であのレベルで英語の授業が始められるということに驚きました。豊里中学校の昇降口には豊里小学校の児童用の靴箱があり、日常的な小学校と中学校の連携の強さを目の当たりにしました。それが成果を上げていると感じました。

私が病院に勤務している頃に、医師は子どもが学童期になると、綾部には有名な私立の教育機関がないものですから京都へ帰って行かれました。今のような学

力テストの結果や先ほどのプレゼンテーションをその医師たちに聞かせたいと思いました。非常に良い実践が進んでいると実感しました。

学習指導要領の改定により小学校で英語教育が始まりますが、今後どのように推し進めていけますか。

<教育長>

豊里小学校が研究指定校になり、教員自身の英語力や指導力を高める研究を行っていました。

ところが、働き方改革の観点で、英語専科教員が指導することで、その時間に小学校教師は学級だよりの作成や授業研究などができるという考え方が出てきました。

では、それが子どもたちにとって良いかとなれば、プラス面もマイナス面もあります。確かに英語科の免許を持っている教師の方が、発音も良いですし、指導力もあります。一方、小学校の担任は児童一人一人のことを分かっている、英語の授業を進めていくことができます。今後どうなっていくのか興味を持って見守っている状況です。

<小南委員>

小学校の間に担任の先生以外の先生の授業を受けるというのも中学校に行った際にはプラスになると思います。小学校教師として採用された時に英語の授業をしなくてもよかった時代の先生に、英語の授業を行えという方が気の毒ですし無茶なことのようには思います。正しい発音ができる人が正しい授業を行う方が良いと思います。

担任の先生と英語科の先生が十分なコミュニケーションを取れる時間を確保することが大事だと思います。

<教育長>

本来ならTT（ティーム・ティーチング）でやればよいのですが、それでは小学校の教員の働き方改革にはつながりません。

<波多野委員>

市長と教育長の間で綾部市の教育の方向性を決めていただき、垂直型の統合の小中一貫教育を進めていく基を作っていただきました。このことが綾部の教育を更に発展させる良いチャンスをもたらしたことになったと思います。これが、先ほどのプレゼンテーションにもありましたように、徐々に成果が見えてきており嬉しく思います。現在、取組も4年目ということで中だるみしないようにしたいということと小学校、中学校の文化という言葉がありますが、それぞれの良さを融合させつつ、一つのまとまりとしてブロックごとに教育が進められたら大変嬉しいと思います。

その中で一つ質問があります。発達段階を前期、中期、後期の4年、3年、2

年のくくりのプランを出されていますが、中期のこの分け方がどうかということについて見解を教えてください。

<森本指導主事>

どのように中期を育てるかという狙いをもう少し鮮明にしていかなければならないと思います。中期に対してどのように指導していくかということがまだまだ固まっていないところがあります。小学校で中期にスポットを当てた学習指導方法を考えていただいておりますが、それが中学校にどうつながっているかということを検証していかななくてはならないと思います。分け方というよりも充実のためにもう少し分析をしていきたいと思います。

<市長>

では、次に進めさせていただきます。協議事項2点目の教育大綱（第1期）の進捗状況について、それぞれ担当別に報告をお願いします。

（報告：学校教育課 村上課長）

（報告：社会教育課 塩見課長）

（報告：文化・スポーツ振興課 小林課長）

<市長>

先ほどの報告について何かご意見がありましたらお願いします。

<四月朔日委員>

報告の中で気付いたことを2点申し上げます。まず、学校給食を完全自校給食にして、栄養士も配置されたことについて、ご配慮いただきありがとうございます。放課後学級についてもより保護者のニーズに合った形態にさせていただきました。ありがとうございます。

学校防災に関してですが、先日の大阪府北部地震によりブロック塀倒壊という二次災害がありました。綾部市でもぜひ調査していただきたいと思います。

<村上課長>

6月18日に発生しました大阪北部地震を受け、6月19日、20日に学校教育課職員と建築課技師が現地調査を行いました。調査の結果、学校と民地や道路との境界となるところには建築基準法に違反するようなブロック塀はありませんでした。

<市長>

通学路はこれから点検するのですか。

<村上課長>

通学路についても各学校に点検を依頼しており、危険なブロック塀があれば通学路の変更等の対策を検討するよう指示をしています。

教育委員会と国土交通省、京都府、綾部市の建設課等で組織する通学路の安全対策の会議を毎年11月頃に行っておりますが、今年は7月末頃に行う予定としております。その中で危険箇所については情報共有していきたいと考えています。

<樋口委員>

教育大綱を策定されたのは平成27年度ですが、その時は市政上の課題があって、上林と東綾の小中一貫校をつくらなければならなかったもので、6番の項目ができたのかなと思います。ところが、1番と6番は共通していることがあって、2項目にわたって小中一貫教育を記載しているのはなぜですか。

<小林理事>

小中一貫教育というのはシステムです。6番の項はシステムを使って学校の教育力の向上を目指すという意図で、1番の項は質の高い学力を身に付けていくということで違う中身として位置付けているところです。

<樋口委員>

よく分かりました。

<小南委員>

1番は学力だけに特化したもので、6番は目指す子ども像のために全ての学校の教育力の向上を意図するなら、学力に特化されているように取れますので、もう少し付け加えた方が良いと思います。

<市長>

所感を言わせていただくと基本は現状の大綱で良いと思います。ぜひ伸ばすところは伸ばして、補うところは補っていただければと思います。

「生きる力」という表現を以って強調されているのは大事だと思います。なぜかと言いますと私の子どもが中学受験をしていた時に塾の先生に言われたことが、「まず解ける問題と解けない問題を見極めなさい。解けない問題には時間をかけず、解ける問題だけやりなさい」と非常に受験のテクニカル的なことを言われました。塾としてはもっともだと思います。一方で、社会に出たらチャレンジしなさいとか努力してあきらめないでやりなさいと言われる。度合いはあるにしても、世の中の子どもが解けない問題はあきらめて、解ける問題だけを頑張ってしまうといういわゆる偏差値をあげるだけのテクニックに走ってしまうようなことを教えていたら、これからの子どもどうなるのだろうと危機感を持ったことが原点にあります。

これからの不確実な世の中を生きていく力を子どものころから身に付けさせるというところを教育委員会や現場の先生方に頑張ってもらっていることは大事だと思いますし、そうしていかなければならないと思います。

ただ、この「生きる力」という言葉は、非常に理念的で概念的なので解釈の仕方によって、スキルやハウツーものになってしまいそうです。つまり、「今はグ

ローバル社会だから英語を勉強しなければいけない」、「IT社会だからプログラミングをできるようにしなければいけない」。

これは「生きる力」ではないと私は思います。英語もプログラミングもあくまでスキルやハウツーであって、「生きる力」とは今何が時代において求められているかを自ら感じ取って、それを見極めて努力して習得していく、いわゆる自立的に成長できる力と考えます。「生きる力」をもう少し咀嚼して伝えて、少なくとも先生方と目線合わせをしておく必要があるのではないかと思います。

<波多野委員>

進捗状況を聞かせていただいて順調に進んでいると嬉しく思います。教育大綱の改訂を考えるならば、小中学校の全てで給食が始まりましたので、それを核にした食育とかキャリア教育とかの文言がどこかに入れればよいと思います。

<市長>

給食の実施が高い評価を受けていまして、実施してよかったと思っています。それでは以上で本日の協議事項を終了します。

- 閉 会
- 教育長挨拶